

## 2019年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 井手 裕子	職名 助教	学位 修士(看護学) (大分大学 2006年)
----------	-------	-------------------------

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	慢性期看護学 看護教育

研究課題
<p>成人慢性期看護学の教育活動に関して、学生が慢性期にある患者および家族の特徴とその看護を理解するために、学内での演習とそれに連動する臨地実習での指導の在り方について考察する。また、学生に実習で受け持たれた慢性疾患患者と学生との人間関係構築に影響する因子について、受け持ち患者の立場からの調査をして、今後の実習指導の示唆を得る。</p>

担当授業科目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎看護学実習Ⅰ(後期)</li> <li>・基礎看護学実習Ⅱ(前期)</li> <li>・成人・老年看護学演習(前期)</li> <li>・成人慢性期看護学実習(後期)</li> </ul>

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎看護学実習Ⅰ           <p>担当した病棟は各論実習で担当している病棟であり、通常からも指導者との連携が取れていたため、病棟師長や臨床指導者と本学の基礎実習Ⅰのねらいについての共有を図りやすかった。学生にとっては、初めて自分の患者を受け持ち、看護職という専門職の立場で患者とのコミュニケーションをとることになる。慣れない病棟という環境への不安や緊張もある中で、実習の目的達成へ向けて、学生の個性に応じた指導へつながるよう、学生への声かけなどを通して実習の進捗状況などを把握するように努めた。また日々指導者とも個々の学生の達成度を確認しながら翌日への指導の方向性についての確認を行った。</p> </li> <li>・基礎看護学実習Ⅱ           <p>実習導入時において、個々の学生に対し1年次で履修済みの基礎実習Ⅰでの課題と、それらを達成するためにはどのような実践がもとめられるかを確認し実習に臨ませた。また初めて看護過程の展開を実施する実習であり、看護者として患者を観察すること、療養生活上の看護上の問題点(気がかり)を解決するための看護実践について、基本的知識や技術の定着化を基盤におきながら個別的な援助への工夫にも、目を向けられるよう指導した。</p> <p>基礎実習といえども、実際の臨床の場面では患者の病状によっては、各論レベルの看護を求められる場合もあるが、そのような場合は学生の学習状況に応じて臨床指導者と連携を図りながら、3年次の学習へつながるように支援を行った。</p> <p>インシデント事象が発生した場面があり、インシデントレポートの指導を要する学生がいた。初めてこのようなレポートを作成するにあたり、決して「罰としての報告書」ではなく看護職としての倫理に基づき次回への医療事故発生予防の目的であることに視点を置いて指導した。</p> </li> </ul>

授業科目名【成人・老年看護学演習】

・紙上患者における看護過程展開において、患者の情報から専門的な知識を用いて科学的に分析するという基本的な指導は勿論のことであるが、各学年ごとの学びは連動していることを意識づけるためにも、2年次の看護過程論での学びも想起させた。情報を分析する段階では、急性期および慢性期という健康レベルにおける看護の特徴をいかに伝えられるかを念頭におきながら指導を行った。看護の方向性を考える際には、急性期の特徴である術後患者の合併症の予防と早期の回復を目指す視点と、慢性期の特徴である疾患と共に共存しながらQOLを維持する視点を比較しながら口頭で説明した。4年生の各論実習で参加できない時もあったが、同じグループの担当教員と適宜調整を図りながら指導に当たった。

・技術演習

血糖測定・インスリン自己注射の技術では、看護技術の正確な習得のみならず、看護者として慢性疾患患者の自己管理へむけての指導をいかに実施していくかについて、実際の臨床での様子などを口頭で説明しイメージさせた。

糖尿病食事指導の演習においては、昨年導入したロールプレイによる演習を今年度も実施した。1回の演習であるため、十分にアセスメントしたうえでの指導は実践できないが、後期での実習へ向けての学びにつなげることができた。また演習内容のワークシートでは、前年度の修正を行い、本演習での目的わかりやすい表現になるように工夫した。

術直後の援助の演習においては、学生はパターン化された看護を実践する傾向にあるため、実際の臨床で遭遇しそうな場面などを話し、単に身体的な援助にとどまらず、精神面での看護の必要性も口頭で指導した。

授業科目名【成人慢性期看護学実習】

・上記の演習において慢性期の看護の特徴をいかに理解させるかということに重要視し、昨年度に引き続き実習事前学習において、糖尿病患者の闘病記を読んで学生個々がとらえた患者および家族の特性やその看護についてレポート提出を求めた。今年度はレポート作成時のキーワードを指定せずに学生に考えさせたが、視点から外れている学生も多く次年度は再検討する必要がある。

・療養生活が長期にわたり、尚且つはっきりしない病態へのもどかしさを抱える慢性期疾患患者および家族の精神的苦悩に少しでも共感できるよう、学生と共にベッドサイドへ行き、タッチングなどの技術を通して患者との援助的人間関係を成立させるよう工夫した。

・今年度初めて実習を行う病棟があったため、臨床指導者や病棟師長に実習の目標や当大学の学生の傾向などを伝えながら、指導の調整に視点を置いた。

・病棟のみの実習では、継続看護についてイメージできないことも多いので、学生を患者会や外来などへも積極的に参加できるように指導者との調整を密に行った。

・病棟での学生への指導のばらつきが生じないように、実習指導者との調整を密に行った。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等 (任期)	加入時期
聖路加看護学会		1996年 4月
日本看護研究学会		1996年 6月
日本看護学教育学会		1998年 4月
日本看護診断学会		1998年 6月
日本糖尿病教育・看護学会		2003年 8月
日本看護科学学会		2008年 10月
日本慢性期看護学会		2017年 7月

2019 年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共 同 研 究			
研 究 題 目	交付団体	研 究 者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個 人 研 究			
研 究 題 目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備 考

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等

学 内 に お け る 活 動 等 （役職、委員、学生支援など）
<p>&lt;3年生アドバイザー&gt;</p> <p>① 個別面接の実施</p> <p>年度初めに担当する 28 名の学生の個別面接を実施した。面接では、2 年次までの学習における課題や後期から始まる長期にわたる各論実習への目標などを学生と共に確認し、前期で見直す内容について方向性を見出せるよう指導した。また、必要時個々の学生に応じて問題解決に向けて適宜面接を実施した。</p>

② 保護者会の企画・実施

本年度も昨年に引き続き、2年生と合同の保護者会を実施した。就職に関しては、就職情報専門業者および就職課からの話題提供の機会を設けた。終了後のアンケート結果では、保護者会のプログラムに対し9割以上の保護者が「適当」と回答し、関心の高さが伺えた。また個人面談を希望した保護者からは、各論実習への取り組み方や就職活動に対する相談があり、保護者の不安を傾聴しながら個々の学生への個別性のある指導の方向性について説明をした。

③ 学習支援（模擬試験実施を含む）

年度初めの個別面接の折に、ポートフォリオの作成を促し後期から開始される実習での自己学習を綴じるなど、4年次の国家試験の学習へつながるように指導した。また、各領域での夏季休暇中の課題について、それらの学習計画を整理し長期にわたる実習期間において効果的な学習がすすむように、「領域別実習事前計画書」を作成し、学生に記入させた。

8月の前期定期試験終了後に、各論実習開始前の基礎学力を確認するために業者模擬試験を実施した。

年度末の12月に学生に対して、模試の結果についての講評と実習前半の振り返りを行った。

④ 就職活動指導

新型コロナウイルス感染症の国内発生に伴い、2021年卒業予定者に対する各医療機関の就職試験やインターンシップなどの開催時期が例年より早まったため、3年次の3月から指導を要することとなった。前例のない事態に対する学生らの不安に対して心理的なケアを行いながら、履歴書作成の指導や、推薦書の作成を行った。